Faculty Development
INVITATION

山梨大学教育学部
第36号
March.31.2019

2018年度教育学部FDフォーラム報告

2018年度教育学部FDフォーラムが1月16日（水）17時から18時15分まで、J号館A会議室にて行われました。

FD（Faculty Development）は、教育や研究などの環境をより良くするための取り組みです。その一環となる本フォーラムは学部の各コース、専攻科、大学院の各専攻の代表に出席いただき、学部長、学系長、副学系長、教育・研究・就職活動等に関わる委員会の代表の教員との懇談を通して、大学の課題と今後について考える機会として、毎年開催されています。

学部長から今回のフォーラムのテーマ「教員養成の現状と今後の在り方」について次のような説明がありました。学生・院生が居心地良く学べることが大事で、そのための環境の整備と維持に努めていること、学習指導要領の移行時期にあること、ゼロ免コース募集の停止や教育学研究科の教職大学院一本化とその募集人員拡充について、教員養成に特化し、教職の実践力を重視した教育がより求められる時代の変化を挙げて述べられました。教育学部に求められる機能の教師の「育成」は「養成」と「研修」から成り立つもので、両者の充実を図っていること、また、教職大学院での初等・中等全教科で実践力を高められるカリキュラム構築や教員組織の拡充、教職大学院進学者に対する教員採用候補者名簿の登載期間の延長といった県教育委員会との連携、さらに、教職支援室による他県の教員採用情報の収集・周知活動により、教職に就ける機会を増やすように図っていることが述べられました。

フォーラムのテーマに関して授業科目、実習、就職・研究支援等について及びより良い教育学部・大学院教育学研究科にするためのアイディアについての意見交換が行われました。同じ県の教員採用試験を受験する学生と一緒に準備する機会があれば良かったという意見、教育現場のリスクマネジメントや教師の労働に関する授業等の開講希望、施設整備・管理についてや教育実習の時間配分の要望等に対して、学部長や関係委員会代表から回答があり、貴重な機会を持つことができました。

参加いただいた学生・院生代表と関係教職員に感謝いたします。

ＦＤ委員会　山下　和之

附属学校での研修報告書

附属幼稚園　教育支援科学講座　大野　　歩

新任者FD研修として、2018年10月30日に附属幼稚園にて研修をさせていただきました。保育中にお邪魔したにもかかわらず、各年齢の子どもたちと遊んだり、一緒にお弁当を食べたりしながら、自由にかかわって観察をする機会を設けていただき、とても楽しく実りの多い研修になりました。

すべての年齢クラスで各々素敵なエピソードがあったのですが、なかでも3歳児の砂場遊びは非常に印象的でした。ある子が砂場に作ったたくさんのプリンの横に、担任の先生がメモ用紙をそっと置かれました。すると、子どもたちはメモ用紙に興味津々。「ねえ、この紙、なんて書いてあるの？」「“こ・わ・さ・な・い・で・ね”だって」「えー、“こわさないでね”、だって！」と、歓声を上げながらの大盛り上がり。そこからは、「こわさないでね」という言葉を魔法の呪文のように唱えながら、スコップやバケツなどを使って次々と砂のプリンにフタをかぶせていきました。夢中になるにつれて子どもたちの語気は熱を帯び、フタを砂に押し付ける力もどんどん強くなっていきます。しまいにはフ

タの上にまたがったり乗りかかったりするほどになり、プリン自体はすっかりペチャンコに。けれども、すべてのプリンにフタを被せ終えた子どもたちは「これで、雨が降っても大丈夫だよ！」と、深い満足感に包まれた顔をしていました。文字というものとの出会いに胸を躍らせ、その文字が表象する意味を知った喜びを、かくも全身で表現する子どもたちの姿に、人間のもつ学びへの根源的な欲求や幼児期の学びの在り方へ、改めて考えを及ばせる一日となりました。

末尾となりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった園の先生方、企画をしてくださったFD委員会の先生方へ心より感謝申し上げます。

附属小学校　教育支援科学講座　若本　純子

新任者研修の一環として、11月13日に附属小学校を訪問し、1年3組において研修させていただきました。朝の会での自己紹介に始まり、授業、給食、そして下校指導まで、丸一日たっぷりと、子どもたちとともに過ごさせていただきました。先生方からは他の学年・学級にも遠慮なく見学にいってよいとのありがたいお言葉をいただきましたが、今回は1クラスで最初から最後まで過ごすことで、教育実習に伺う学生たちの気持ちもうかがい知ることができればと思い、そのようにさせていただきました。

子どもたちの友好的で積極的な姿が微笑ましく印象深かったのはもちろんですが、それにも増して心に残ったのは、担任の先生の姿でした。誇張ではなく1分の切れ間もなく子どもたちとかかわり、一人ひとりの学校生活を支えておられる姿に頭が下がりました。小学校低学年の子どもには、学習指導と同じくらい生活指導も行う必要があると思われますが、それゆえに細やかな観察と配慮、そして互いの信頼がひときわ求められるであろうと思います。私が伺った日も、昼休みの作業の合間の時間に、おそらく個人的に指導が必要な子どもさんと思われる児童と、ご自身の机で数分お話をされていましたが、先生のあたたかくも真剣なまなざしと、まっすぐに向かい合う子どもの横顔が今も目に残っています。

私は心理学を専門としており、先生方の困りごと（特に心理的な面で指導の難しい子どもに対する理解やかかわり方）に対する助言をすることが多いのですが、先生方がそのかかわりの機会を作るためにどれほど力を尽くしておられるのか見失ってはいけないとの思いを新たにいたしました。それに加え、教育実習に伺う学生たちにとって、このような先生方の姿に触れる機会がいかに貴重かも再確認させていただきました。

末筆ながら、大変ご多忙のところ、このような機会を作っていただきました附属小学校の皆さまに心よりお礼申し上げます。

附属小学校　教育支援科学講座　岩井　哲雄

初任者研修の一環として、11月12日（月）に附属小学校の2年生のクラスを一日見学させていただきました。当日の時間割に従って、午前中は、朝の会から始まって、特活、算数、音楽、国語の授業を拝見し、給食と清掃を挟んで、午後からは、読書の時間を拝見しました。算数の時間には、1パック3個入りのプリンを例に子どもたちの笑いを誘いながら、九九の3の段の理解を図ったり、また国語の時間には俳句の字余り・字足らずといった事項に触れて、子どもたちに少し背伸びをさせてみたり、担任の先生の多彩な授業の展開に私自身もいつの間にか引き込まれました。

なかでも特に印象的だったのは、やはり授業の中での子どもたちの姿です。先生の問いかけに対して子どもたちは自分の考えを述べるだけでなく、お互いの発言をよく聴いており、互いに応答を重ね合いながら授業が展開していく様子が何度も見られました。特に、大人であれば聞き逃してしまうような小さなつぶやきを、子どもたち同士が本当によく聴いていることがとても印象的でした。

いたるところでコミュニケーション能力の重要性が叫ばれていますが、その場合、たいていは話す能力に注目が集まりがちだと思われます。恐らく、話す行為は可視的で評価の対象にしやすいからでしょう。これに対して、聴くことは実質的にコミュニケーションを成立させる契機であるにもかかわらず、目立つ行為ではないので話すことほどは評価されていないように思います。自分の考えを述べるだけでなく、他者のそれをよく聴くこともできること、そしてそれに適切に応答すること。日々の授業をとおして、そうした力が子どもたちに育っていることにたいへん感銘を受けました。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださいました附属小学校の先生方、FD委員会の先生方に心より感謝申し上げます。

附属小学校
附属教育実践総合センター　川本　静香

11月12日（月）、新任教員の研修で、附属小学校2年生のクラスに1日参加させていただきました。私はスクールカウンセラーとして学校に関わるなかで、教師や学校という場が、子どもたちの個性や自己肯定感をいかに認め、伸ばしていくのかについて、関心を持ってきました。今回は、そうした関心を持っていた私にとって、「小学校の1日」をフラットに経験させていただくことのできる、とても貴重な機会でした。

この日は、国語、音楽、算数、体育の授業と、給食、掃除、下校指導を体験させていただきました。国語、算数の授業では、子どもたちのペースに合わせた先生のコミュニケーションに驚かされました。また、体育や給食では、先生の指示のもと、子どもたちが主体的に準備を行い、活動をする姿を見て、2年生でここまで自分の役割を判断して動くこ

とのできる子どもたちの様子に、ただただ驚くばかりでした。
小学校では、授業だけでなく給食や掃除など、日常生活に関わるいろいろな活動が行われます。今回、研修でお世話になったクラスでの体験を振り返ると、先生が子どもたちの得意な面や、もっと伸びる面について深く理解され、子どもたちの主体性を尊重したクラス経営が行われる中で、子どもの個性や自己肯定感が伸びるのだと、改めて気付かされました。
最後に、このような貴重な機会を与えていただきました附属小学校の先生方、そしてFD委員会の先生方に心より感謝申し上げます。

附属小学校　言語文化教育講座　伊﨑　孝幸

新任教員の初任者研修として11月15日（木）に附属小学校を見学させていただきました。授業の見学ということで、はじめは授業参観のようなものを想像していたのですが、実際は違っていて、人に見せるための特別な授業ではなく、普段通りの授業を見せていただきました。見学は主に５年生のクラスで、１時間目から６時間目まで。自分が国語教育系に所属していることもあって、国語の時間を特に注意して拝見しましたが、国語に限らず、どの授業も生徒の興味や関心をひきつけるために様々な工夫が凝らされ、生徒が実に生き生きと課題に取り組んでおり、とてもよい授業だったと思います。中でも印象的だったのは、先生が生徒に問いを投げかけた後、必ずゆっくりと時間をとっていたということです。すぐに解答や解説に進むのではなく、考える時間を意識的に設けることで、思考力を育もうとしていることが伝わってきました。こうした思考力がこれからの時代において、ますます必要になることはいうまでもありません。これは私にとってもとてもよい勉強になりました。
そして何よりこの研修でもっとも心に残ったのは、生徒たちの明るさ、元気さです。挨拶はもちろんですが、休み時間や給食の時間など、１日だけ見学に来ている私にも積極的に声をかけてくれました。そんな生徒たちの姿を見ていると、教育の大切さ、またその責任の重さについて改めて考えさせられました。
最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さった附属小学校の先生方およびＦＤ委員会の先生方に心より感謝申し上げます。

附属小学校　教育実践創成専攻　山本　英寿

今回、初任者研修として、11月２日に附属小学校を訪問させて頂きました。４年生のクラスに入り、午前は、算数、音楽、理科の授業を、午後は、体育、道徳の授業を拝見しました。子供たちは、自由な発想で考え、学び合いを深めている姿がとても微笑ましく、私も一人の子供として、授業に参加しているような思いになりました。教師がファシリテーターの役割を果たしながら「開いた発問」と「閉じた発問」を使い分け、子供の考えを引き出して思考を促していました。そして、子供たちは、課題やめあてをしっかり受け止めながら、生き生きと学習活動を行っていました。授業が「分かる」「楽しい」と感じる子供たちの思いが私にも伝わってきました。「子どもたちの限りない可能性を引き出し、伸ばすこと」これは云うまでもなく学校教育の命題です。そして、その営みが学校経営であり、学年・学級経営です。また、子どもが自らの可能性を見出していると実感できるのは、共感的な人間関係の中で、豊かな言語活動をベースに自ら主体的に学んでいる時なのではないかと思います。授業参観だけでなく、休み時間や給食など子供たちとの触れ合いの中で、教育の意味と魅力を考える機会となりました。何より、子供たちの純粋さに癒され、たくさんのパワーをもらいました。この研修は、私にとっても大変有意義な時間となりました。この機会を与えてくださいました、附属小学校の先生方、ＦＤ委員会の皆様に感謝申し上げます。

附属小学校　教育実践創成専攻　茅野　政徳

11月１日に附属小学校を訪問し、３年生の一学級を朝の会から下校まで参観する機会を得ました。昨年度まで小学校教員だったこともあり、教科指導だけでなく給食や清掃指導にも手を抜かない担任の先生の姿勢に感銘を受けました。国語や算数では、子どもたちが既習を生かして解決できる課題を用意しつつ、新たな考え方や技能が必要な場を設定し、課題を解決する中で自らの学びの自覚と向上的変容を味わえる工夫が随所に見られました。理科では、日なたと日かげを比較する学習が行われ、実体験を想起させたり、実際に観察する時間を確保したりするなど、日常生活との結びつきを意図していることが理解できました。
何より心に残ったのが、学級に対する子どもたちの帰属意識の高さです。自分の考えや思いを表出すれば、友達は必ず耳を傾け、反応を示してくれる。日々くり返される協同的な営みにより、「自分はここにいていいんだ」、「認めてくれる仲間がいる」、「仲間の話を聞けば、新たな発見がある」。そのような肯定的な意識が高まり、笑顔の花が咲き誇っていました。
私も国立大学附属小学校２校に勤務した経験があります。通学範囲が広いのは本学附属小学校も同様で、日常的に友達と遊ぶことができません。子どもたちは、習い事の発表会があること、家の近所のお店、通学に使うバスや電車などたくさんのことを教えてくれました。「もっと自分の身の回りのことを知ってほしい」・・・その願いを叶えることは物理的に難しいこともあります。しかし、環境面のハンデを補って余りあるほど精神的に満たされた子どもたちの姿にふれ、学校の役割を見つめ直す契機となりました。本学は、附属学校とキャンパスが隣接しているのも魅力です。研究発表をはじめ、また子どもたちに会いに行きたいと思っています。
最後になりますが、快く研修の機会を与えて下さった附属小学校の教職員の皆様、FD委員会の皆様に心より御礼申し上げます。

附属小学校　教育実践創成専攻　梶原　郁郎

教科の知識において私たちは分かっていない知識の方がはるかに多い（例えば記憶している元素表を活用して未知を思考した経験を自問してみよう）。一年間の実習を終えて院生に、授業参観して「なるほど、分かった！」と納得した知識を尋ねても、一例がなかなか挙がってこない。けがをしたとき体に痛みが出るように、分からないときにも頭痛が出ればいいのだが、そうではないので、「分かっていない」ことの自己認知は容易ではない。その認知を院生に促すには、教科の知識を学び直し、「分かった」というレベルに到達しておくことが私たち教員側の要件となる。

今少し言葉を加えると、授業参観を通して「分かった！」が得られなかった場合、教科の知識理解に自ら取りかかり、参観した授業の代案を構想できなければ、児童生徒に知識理解を保障できない。こうした院生の課題は、そのまま私たち教員のFDの課題でもある。①「6 ÷ 2/3」の例題を作り解説できない現状、②その他の計算学習が意味理解ではなく技能の学習に留まっている授業、③漢字学習が機械的記憶に停滞している授業等、山積する授業改善の課題は院生の課題、したがって私たち教員のFDの課題でもある。

このような毎日の課題意識の中で、附属小学校でのFD研修をさせていただいた。理科の教科書（３年）に、日なたの地面と日かげの地面の温度を調べようという学習がある。どちらがどうして温度が高いかは、児童においても自明で、思考するまでもないだろう。したがって授業後、教師も児童も新しいことが「分かった！」という実感は得られないだろう。では私たちはその活動の代案をどう作るか、教科書を前に考えなければ、児童に新しい「分かった！」を保障できない。その代案作成の機会をいただき、院生指導の内容をひとついただいた今回の研修にお礼申し上げます。

特別支援学校　教育支援科学講座　小野田　亮介

初任者研修の一環として附属特別支援学校を訪問し、様々な授業を見学させていただきました。私の専門領域は教育心理学であり、特別支援教育とは隣接とは言わないまでも近しい関係にあります。その一方で、私は特別支援教育について学ぶ機会をほとんど有していなかったため，今回の機会をいただき、特別支援学校の見学を希望しました。

一般的な教育心理学の研究では，児童生徒に対して教育的介入・支援を行い、個人差を除去（≒均す）した上でその効果を検証します。一方、特別支援学校では、個人差を前提として学級の成員が授業時間を共有し、学習するように思われます。その中で、どのような学びのプロセスが生起するのか、わくわくしながら参加しました。

見学したすべての授業が印象的でしたが、特に記憶に残っているのは、中学生学級での「大人になること」を考えさせる授業でした。大人になると言っても、何をもって大人をイメージするかは生徒ごとに異なります。先生方はそうした異なりを活かし、中学生としての自分に自信をもっている生徒には「先輩として振る舞うこと」から、身体的特徴に興味がある生徒には「ひげが生えたり、筋肉がつくこと」から大人をイメージさせていました。生徒は、最初興味がない観点（例：ひげが生える）でも、先生の工夫（例：実際に先生がひげそりでひげを剃ってみせる）によってクラスメイトが興味を示すことで、楽しみながら次第にその観点を内化しているようにみえました。

今までとは異なる環境に触れたことで、半ば無自覚的に使っていた「個人差」や「個人差を考慮した授業」といった用語について自然に内省していたように思います。これはとても貴重な経験でした。その機会を与えていただいたFD委員会の先生方と、急に現れた私に優しく接してくださった附属特別支援学校の先生方に感謝申し上げます。

〔ＦＤ研修報告〕　大学コンソーシアム京都第５回ＦＤ合同研修プログラムに参加して

ＦＤ委員会副委員長　田中　武夫

2019年２月４日（月）、池坊短期大学にて行われた第５回FD合同研修プログラムに参加しました。大学コンソーシアム京都は1995年より加盟大学と共に、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組みとして、京都地域におけるＦＤ活動を推進しています。年に５回行われるFD研修の最終回である第５回のテーマは、「学習者中心の授業ワークショップ」でした。領域や分野を問わず、主体的な学びという観点から、一方通行の知識伝達型授業から学習者中心の授業への転換が求められており、今回の研修では、「アクティブラーニング」を取り上げ、それらが注目されるようになった背景や期待される効果、問題点等について松本真治氏（佛教大学）、森希理恵氏（平安女学院大学）、澤田美恵子氏（京都工芸繊維大学）による問題提起や実践発表がなされました。その後、参加者によるアクティブラーニングについての情報交換を行うワークショップを通じ、アクティブラーニングを取り入れた実際の授業設計案の作成と相互評価を行いました。他大学でのアクティブラーニングの取組みや課題について知ると同時に、自分自身の大学授業での取組みとその反省、今後の取組みについて考える貴重な機会となりました。

〔ＦＤ研修会〕　教員養成のためのＦＤ研修会

ＦＤ委員会委員長　服部　一秀

教員を養成する本学部では、個々の科目において何をめざし、そのために何をどう学ばせるとよいか。どうすれば学生の能動的な学修を可能にすることができるのか。新しい学習指導要領と教育要領の公表を契機とし、日々の授業を振り返るとともに授業改善の可能性を検討していくため、３回のＦＤ研修会を実施しました。また、それらに加え、近年における教員採用試験の傾向に関するＦＤ研修会も実施しました。何れにおいても、講演を踏まえ、熱心な意見交換が行われました。毎回のアンケートによれば、今年度のＦＤ研修会は大変好評でした。講師をつとめていただいた４人の先生方に深く感謝申し上げます。

実施日	講　師	講演題目
2018年　6月27日	新野貴則先生（芸術文化教育講座）	図画工作科の授業実践に必要な力の育成
2018年10月24日	渡井渡先生（教育実践総合センター）	教員選考検査の概要
2018年11月21日	佐藤寛之先生（科学文化教育講座）	理科の授業実践に必要な資質・能力の育成
2019年　2月20日	東海林麗香先生（教育実践創成講座）	教職大学院における「理論と実践の往還」を目指した教育

授業改善の文化を本学部において一層育んでいくため、今後もＦＤ研修会を役立てていく必要がありますし、そのよりよい在り方についても検討をすすめていくことができたらと思います。